

不安から信頼関係へ

荒川 哲郎

The Creation of Credibility from Suspicious Human Relations

Tetsuro ARAKAWA

1. はじめに

「不安の時代」と呼ばれる社会の状況で、私たちの意識が大きく変化している。最近、内閣府が2004年7月に報告した治安に関する世論調査が大きく新聞に報道された。この調査では「ここ10年で日本の治安が悪くなった」と思う人が9割に達している。また「自分や身近な人が犯罪に遭うかもしれないと不安になることが多くなった」と思う人が8割を超えている。治安が悪くなった理由の一番には「外国人の不法滞在者が増えたから」を半数以上(54.4%)の人たちが選び、「自分や身近な人が犯罪に巻き込まれるかもしれない」不安の対象になる人としては「情緒不安定な人や怒りっぽい人(すぐキレる)人」を選択した人が最も多く、約半数(49.4%)である。次に「外国人の犯罪グループや不法滞在者」(43.2%)そして「暴走族などの非行集団や非行少年」(43.1%)を不安になる人として選んでいる。

いつ犯罪に巻き込まれるのかとの不安、テロ事件が日本でも起きるだろうかと恐怖、それに加えて自然災害への怯え、重なる不信とストレスが溜まった状態である。

不安から監視体制へ

不安になると、どのような現象がみられるのだろうか。「不審な人」を監視するシステム、たとえば監視(防犯)カメラなどが取り付けられていく。そして駅、スーパーマーケットなどにタムロしている人、酔っ払い、大声で話しをしている人も犯罪を犯すおそれがあるとして、取り締まられる。イギリスでは少年の溜まり場に監視カメラが設置され、犯罪の予防、虞犯の検挙に使われている。

監視カメラの社会現象のキーワードは「疑いのまなざし」である。監視カメラには、無作為にすべての人が写し出されている。防犯への意味が目的であるが、副次的には、職場での勤務状態のチェックであったりする。私たちはカメラに見張られて、管理されている。

疑いから排除への展開

多くの精神障害者 家族、医療従事者、弁護士、一般市民の反対を押しきり、強行採決により成立した「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行なった者の医療及び観察等に関する法律」は2003年7月から施行された。殺人、強盗などの重大な罪に当たる行為を行なった人が心神喪失などの理由で不起訴処分になった場合の「処遇手続き決定」に重点が置かれ、社会的安全の観点が重視されている法律である⁽¹⁾。この法律の背景には2001年6月の大阪教育大学附属池田小学校で起きた悲惨な児童殺傷事件が存在する。この事件の犯人が精神障害者であることをマスコミが大きく報道して、小泉首相も「法改正も視野にいたした検討を行なう」ことに言及した。

しかしその後、犯人は精神障害者を装っていたことが判明した。この法律の目的には「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行なった者」に対する「適切な処遇を決定するための手続きを定めること」により「継続的な医療」ならびに「その確保のために必要な観察および指導」を行ない、「病状の改善及びこれに伴う同様の行為の再発の防止等を図り、もって社会復帰の促進を図る」としている。

過去に心神喪失により他人に甚大な犯罪にあたる行為を行なった人は再度、同様の行為をする。つまり「犯罪を犯すおそれ」があることを前提にしている。「犯罪行為をするおそれが明らかにない」場合を除き、検察官が審判の開始の申し立てをしなければならない。裁判所は裁判官と保健精神審判員(精神科医)との合議制の審判により、入院、通院などの処遇を決めることができる。この法律のキーワードである「犯罪を起こすおそれ」について考えてみる。第一には過去に心神喪失の状態で行った犯罪行為をした人として、画一化していることに危惧する。対象となる人も一人ひとりの違いがあり、過ちを悔い改める教育の可能性が否定されている。一人ひとりの教育、人間関係、生活環境の違いをとらえきれていない問題が存在している。第二には、不確実な未来の想定により、本来、人間は自由で

あるとの権利が奪われる危険性、つまり自分の生き方を自己決定できる権利を持つ人間が自分の意志とは異なる生活、強制的な入院生活を強いられる可能性があることが問題である。未来は誰にも予測不可能なことである。しかも私たち人間は状況により、加害性を持ち得ることは認識されている。飢えてお金がなければ盗みをして食することも予測される。その時、争いがあれば、人を傷つける可能性がある。また感情の自己制御ができない限界を越えた状況、たとえば過重なストレスのある戦争の状況では人は自制心を失う。その時、暴力性が顕われ、モノをこわし、そばに居た他者を傷つける可能性もある。もちろん内なる暴力性と自己制御とのせめぎあいには人はバランスを懸命にとり、他者を傷つけることの可能性を抑止する努力をする。

三番目の問題としては、過去に心神喪失の状態で犯罪を犯した人を一括して、予想ができない未来の想定を検察、裁判所、医療機関の権威のもとに行なうことである。社会の安全を保つとの大義を掲げ犯罪行為をするおそれのある人＝心神の喪失をする人＝精神障害者を管理することについて権力が侵入している。事実ではなく、「おそれ」のもとに排除、拘束を法律により合理的に強制することは人権の侵害である。この法律の構造には人を信頼する可能性を絶望視している根があることにきずかされる。そして精神障害者を社会の危険な人として排除していることである。

「まず疑え、そして危険な人を社会から排除する姿勢」はテロリストとして、疑いを空港でかけられる私たちに相似する。一人ひとは汗の臭いが違うように固有な存在であり、犯罪を犯す可能性も異なる。しかし一方的に画一化されて、処遇との名の下に、他人から自分の人生を決められていく恐怖に怯えつづけなければならない。画一化されることは一人ひとりの存在が見えなくなる危険性、さらに人間を不安にさせることにつながる。

内閣府は2003年（平成15年）から10年間の障害者基本計画を策定した⁽¹⁰⁾。「国民誰もが人格と個性を尊重して、相互に支え合う共生社会の実現」が基本理念である。「障害のある人が社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下に社会活動に参加・参画し、社会の一員として、責任を分かち合う社会の実現」（障害者白書2004）と、人権、自己決定、社会活動への参画がキーワードとして、共生社会の基本になるイメージをつくりだしている。具体的に共生社会の実現の戦略、障害者基本計画「重点施策実施5か年計画」のなかの一つに、精神障害者施策の充実があげられている。まず社会的入院患者（約7万2千人）の退院・社会復帰を目指すとして、保健・医療そして福祉における施策があげられている。

現在、私（私たち）は現実に「不安」な社会状況に押し込められながら、生きている。一方ではグローバルな基準である「共生社会」の創造が課題であり、具現への行動が問われている。しかしながら障害のある人、外国から移り住んでいる人たちと共生する社会の創造は多数の人が現実味のない目標としている社会の状況があるのではとの疑問を持つ。私自身が「具体的に誰と、何を、どのように人間としての関係を切り結び、共生社会をつくるのか」との方略が見えていないために、「現実味のない」との表現に行き着いたのかも知れない。そこで（1）社会状況、社会意識の変化の認識、（2）社会の矛盾に向き合う自己の意識構造、また（3）現在の自己と社会との関係の基本的課題についての議論の必要性を思っている。さらに相互の関係を創造して、新たな自己を作り出す自己の変革、さらに社会の変革への可能性について考えてみる。

まず、社会意識の調査の検討から始めてみる。そして大阪の生野・東成・天王寺での精神障害のある人たちの活動を紹介して、障害のある人の運動の歴史的経緯に学びたいと考えている。それが不安な状況から脱していく手がかりになると考えているためである。

2. 社会は今

2-1. 内閣府の治安に関する意識調査から

調査結果の特徴の一つには来日の外国人と治安の悪化が結びつけられていることである。「治安の悪化の原因」を聞いている項目で、治安が悪くなった第一番目の理由に不法滞在の外国人がランキングされている。そして「犯罪へ巻き込まれる不安の原因」のランキングの上位の二番目に不法滞在の外国人を原因としている。

それでは外国籍の日本に在住している人の犯罪の現実はどうのような状況であるのだろうか。犯罪白書⁽¹¹⁾（2004）によれば、外国人の検挙者は1万3077人で一般刑法犯の検挙人員の総数34万7558人の3.8%にすぎない。たとえば、不法に滞在している外国の人達の犯罪をみると、強盗については全国で64件であり、強盗の認知件数全体6984件の0.91%である。しかも1999年の入管法の改正により不法に滞在している罪で検挙されている件数は急激に増えている。2000年に296件であつたが、2003年には1318件と四倍以上に増加している。不法の滞在者は厳しい法規制で検挙されている人が急増して、犯罪率は低下している。

2-2. 支配される幻想に閉じ込められる実在する人間

さらに問題にしたいことは前述の内閣府の調査のなかで「自分が犯罪へ巻き込まれる不安の原因になる人」

を情緒不安定な人、怒りっぽい人（すぐ切れる人）を原因にあげていることである。この文脈では、精神障害のある人たちも含まれると考えられる。はたして精神障害のある人は犯罪にどのように関係しているのだろうか。

犯罪白書⁽¹⁴⁾（2004）によれば、精神障害のある人達の検挙率は非常に低い。検挙者は2359人（内精神障害の疑いのある人が1539人）で一般刑法犯の検挙人員の総数34万7558人の0.68%にすぎない。罪名別では、窃盗、詐欺、横領が最も多く、53.5%である。殺人、強盗については、殺人120人、（内、疑いがある人69人）、強盗は、46人（内、疑いがある人は24人）で、それぞれ検挙人員全体の8.5%、1.1%で低い割合である。マスメディアの報道などから受けるイメージと現実の資料の大きなギャップがあることが解る。なぜ精神障害のある人と犯罪が安易に結びつけられるのだろうか。

吉田智弥⁽¹⁶⁾はベストセラー『レディ・ジョーカー』、そしてグリコ・森永事件についての作品「闇に消えた怪人」を例にあげ、次のように述べている。「文字に書かれない噂レベルでは麻原彰晃や酒鬼薔薇聖斗や林真須美など異常犯罪の容疑者を理解する手がかりに部落というキーワードが用いられたこともあったという。それらの「裏情報」がいったん発せられたら後は止まる所を知らずに、既成の差別的コンテクストの上で、内容的に増幅されて、隠然とした形で長期にわたり、流通していると考えられる。（中略）そして噂が行き交う時には、そのブラックボックスの部分を読み解く合鍵に部落という言葉が用いられること等々が問題なのである」と部落差別の問題の本質を指摘している。「不可思議な犯罪事件」を解きあかし、納得させる手段として、なぜ部落の言葉が使われるのだろうか。「精神障害者」「精神科への通院歴がある人」が犯罪の予備軍として噂を流されている現象と相似している。精神障害のことを語る時、実名ではなく、「匿名」が使われる。差別を怖れるからである。しかし「自分の病気、生きていく障害のことを分かってもらいたい」と葛藤する。「カミングアウト」は自己を社会のなかに根づかせることである。「自分の存在を世の中に知ってもらいたい。自分を認識してほしい」とずっと思う気持ちがあり、病気を隠さず実名を名乗る人が最近では増えている。しかし多くの人が自分の身を隠しながら生きている状況がある。

実名を名のれない状況、自分を社会のなかに位置付け、自己を主張したり、意見をせめぎあわせることができない状況を解放するのではなく、被差別状況にある人へのインターネット上での「ネット掲示板2ちゃんねる」の差別落書きが続いている。そして被差別の

現実を見ようとしないう社会状況に「被差別の状況に繋がりがきれない人達」がのまれている。インターネットの無機質性と人間に内在する不可視な幻想が絡み合い「部落民」「精神障害者」差別が再生産されていると思える。「見ようとしないう」の内なる意識の暗闇に閉じ込めてきた幻想と連なり、新たな幻想が再生産されている。そして「不可解なもの」として、単純に言説化されている。「精神障害者は怖い。エタは死ぬ」と、自分の言説を世間の物語に化して、存在を叩きつぶし抹消している。「人を値踏みする快楽」にドライブがかかり、ストレスそして社会への不満の発散の対象化されている。ネット掲示板2ちゃんねるには「積みもり積もった不満や不安を権力を有する元凶へぶつけば報復が怖い、部落民、障害者、外国人へ向けて誹謗中傷の「落書き」を執拗に続ける」（全国のあいつぐ差別事件2004年度版）⁽¹³⁾

そして「見えない幻想」は「不安」をつくるとして簡単に権力からも操作されて、抑圧されていく。世間の人はますます怖れ、それらに縛られて、見えない不安の谷底へ落とされていく。被差別の人たちは「何をするのか」を予測できないとして「恐怖」につながる回路に短絡化する。コミュニケーションの回路に再生産される人と人との具体的なつながり、そして存在の認識は絶望視されていく。存在が抹殺されていく危機的な状況下に私（私たち）は生きている。

2-3. 「疑いのまなざし」と自己責任

疑いのまなざしにさらされる状況が増えている。現在、空港などではすべての人が疑われ、監視されるシステムがつくられている。「自分はテロリストではない。したがって監視があればあるほど、安心である」と思う自分がある。しかしこれらの監視システムの背景には犯罪の予防は疑わしき個人を捕らえろと解決できるとする「壊れた窓」理論、つまり、犯罪が生じる前にその芽を摘み取る考えがみられる。しかも「個人の責任」論に集約されている構造が見えてくる。現在の社会的矛盾、つまり利益を追求する戦争が続き、人を殺す武器売買がビジネスになり、憎しみを再生産している社会構造を維持している思想、政治、経済は自己批判しない。

基本的に人から信用されない、また常に疑いのまなざしにさらされると、苦痛で拒否したい自分が存在する。なぜイヤなのだろうか。疑いのまなざしにさらされることは、自分の存在が孤立させられ、さらに排斥される恐怖がうまれてくる。そしてコミュニケーションの閉塞状況を産む連鎖のなかで不安が確実に増幅する。人は自分のことを信頼される快と信頼されない不快状況を敏感に感じとれる。その狭間を行き交い、表

現の調整をはかる。しかし不快な状況は自己の閉塞、コミュニケーションの断絶へとつながる。「自分の本音は出せない、出さない」との「自分のありのまま」を自由に表現するコミュニケーションの不可能性を断定する状況が生まれる。そして自ずから孤立の淵へと追い込む。孤立は不安を呼ぶ。特に権力への服従への状況判断が死活に関わる時、自分をオブラートに包み、見えないようにして、安心する行為につなげる。しかし自己規制、自己防衛の力が過剰に必要となり、ストレスと不安が貯えられる。そして安藤貴男⁽²⁾が指摘するように『権力から遠い人間は何もかも見張られて萎縮する。自己規制して生きる自分を「善」の側に置き、見えない「悪」への不安から自由になりたいと、「悪」の排除を願う。そして、多数派の社会、権力から秩序維持のため、規制、抑圧され「社会の通念」に従う状況が重ねられる。』

3. 学校は今

愛国心と自己喪失

学校の卒業式で、「日本国民は国旗、国歌を愛するのは当然である。君が代を起立して歌うのは日本人として「正しい行為である」と国家権力により体制化された教育行政から監視つきで迫られる。秩序を保つために起立して君が代を斉唱することを行為は「正しい」、起立して歌わない人の行為は「犯罪行為」として罰を受けている状況が日本の首都、東京にある。自分は故郷の風景は愛しても、「イラクへ軍隊を派兵して、侵略する行為を正当化する」国を愛することできないとの理由を持つ思想性はその場から排除されてしまう。校長から君が代を起立して歌う3分間の「思考停止を求められた教員がいる」との話のように、3分間は人としての存在を消し去られることを求められる状況がある。そして3分間ではなく、その時間が無限に伸ばされていることに私達はきずかない。次第に自己表現の自由も縮小して、窒息している不安な私は活性する術を求めている。「国旗を崇め、君が代をなぜ歌わない教員がいるのだろうか」と相対化しながら、歴史をとらえかえし、さらに世界の情勢のなかで考え直すなどをして、一人ひとりの思想性を育てる教育が必要と考える。教員が「自分が想う国家の概念」を議論して、柔軟に子ども達とも多様な考えを交わすことは認めあい、せめぎあい、包括するインクルーシブな教育につながる。「考えの違い、多様性」を排除する「分離教育」は寛容さを捨て去る教育に思える。

現在の社会状況にみられる愛国心の問題と重ねてみる。国を愛することとはなんだろうか。国を愛することは個人の自然な感情、認識である。それは個の自由

な意志決定に任せられることが本来の在り方、つまり自由権に含まれる概念ととらえる。しかし現在の「愛国心」は「ナショナリズム」の概念を持ち、人を同一の考えに従わせるルールをつくり（同一律）、それに同意しない人は国家体制の権力のもとに排他して差別している社会を再編していることが見えてくる。外国から日本に移り住む人達と共に、社会を機能させなければ、現在の生活水準は維持できない。経済的な見通しを立てるために「日本人」だけの社会構成、機能には限界がある。それは国際機関はすでに認識して、日本政府への外国からの「寛容な人の受け入れかた」を勧めている。

しかし単一の国旗、国歌に集約する政治的行為は来日外国人が150万人以上生活している社会の現実と相容れない。しかし日本に住むすべての人に日本人らしく存在させようとする教育、社会規範をつくりだしている。「日本人らしさ」を強調する愛国心教育は頑に学校で「心の教育」として強行されている。テッサ・モリスズキ、香山リカ⁽⁹⁾は「不安な状態では、頼れる目にみえるものを人は求めている。人は自分の不安な状態の最後のよりどころとして、「日本」という国家概念を求め、位置付けている」と指摘している。国家権力は民衆の心理状態を読み取り、ナショナリズムの概念を社会のすみずみまで根づかせている。主体的行動を取り、多数派の状況に疎外されることを恐れない勇氣ある行動をとる人には思考停止をさせ、沈黙させ、自己喪失を強いる。自己喪失は不安な状態から顕現されるものであるが、自己を抑圧、喪失することで、不安な状況に追い込んでいる意図的な政治戦略に思える。

4. 教育は今

教育における自己責任化

個人が行動の自己規制をして、自己防衛に多大なエネルギーを費やす状況のなかで「責任の取り方」論が大きく変化している。何か問題をおこすと「自己責任」の下に解決することが強調されていく。たとえば、少年の犯罪について、大人の側からこどもへの強力な「自己責任」論による追求が続いている。少年事件の「悪質化」「低年齢化」を理由に、刑罰の適用年齢を従来の16歳から14歳へ引き下げることを含む少年法の改正が成立した。そして教育改革国民会議でも「問題を起こす子どもへの教育はあいまいにしない」との報告書が提出されている。さらに14歳未満のこどもも少年院へ送致できる法律の改正が検討され始めている。(2004. 8. 26 朝日新聞)

様々な社会背景のなかに犯罪が生じる理由を簡単に

整理して、固定化してしまい過去へと追いやる。連帯責任論、こどもが起こす問題は私（私たち）に迫られている学習課題であるとの認識はない。問題解決のために、「私は何に、どのように向き合うのか、そして私はその問題から何を学ぶのか」との連帯責任論が内包する人と人を繋ぎ、過去を反芻して自分を悔い改める考えは遠ざけられている。そして教育現場などで起こる問題の解決も子どもに対する厳しい懲罰主義で臨むことに躊躇しない状況が作り出されている。子どもを罰するだけで、問題が解決できるのであろうか。子ども達を犯罪へ追い込んだ私たち教員の生き様、価値観、具体的行動、さらに政治、経済、教育の社会要因、そして社会規範を構成している私（私たち）の人間関係が問われている⁶⁵。

三重県のある中学校では子どもたちが学校が「荒れた」時期、教員全員が全校の子ども達の一人ひとりに向き合い、話を聞く機会を作った。こどもたちが荒れる原因、その背景にある様々なことをまず聞くのではないかと徹底したグループ活動のなかで、討議をした。そして見えていなかったこどもたちの現実を垣間見ながら、一人ひとりのこどもたちの気持ちを確認し、想像し、とらえようとした。こどもの怒りが交錯し、「苦しみ」そして自己の否定に悩む姿が確認された。こどもだけを変えようとか、子どもだけを教育しようとかではない。こどもとの関係の中で生きているおとなを相対化した。西山明は「こどもだけを変えようとか、こどもだけを教育するとか、そのような方向はこどもはうんざりしているし、そういう大人社会を信用しない」と指摘する。社会の不条理に抗して一緒に闘い、苦しい時に応援してくれる人を求めているのである。

しかし、現在の学校は個別化へ向かっている。特に「習熟度別学習」では教師と子どもは一對一の対立構造をつくり、個別の計画、実施、評価システムのなかに組み込まれている状況である。子どもと共にせめぎあえる動的なコミュニケーション関係が失われている。そして子どもたちは評価、管理され、ぽつんと「ひとりぼっち」の存在にさせられている。こどもたちは教師と共にせめぎあう教育のパートナー役の座をおさられているのではないだろうか。意見を表明する権利がこどもの権利条約で保障されているが、子ども達は権力への服従を安心の居場所として選ぶ状況、そして個性的表現を失うことに何のためらいも感じなくなるメイン・ストリームができていないだろうか。

5. 障害観の変化と生き方の抑圧

小沢牧子（2002）は精神医療、心理臨床のなかに

「生活の問題」を「病気の問題」に問題をずらす技法が使われていると指摘している。どのように問題がずらされているのだろうか。たとえば「こどもは落ち着かなく、動きまわる」との「現象」がその原因、背景も認識、そして理由も確認されないで、「注意欠陥多動障害」と障害へ変化させられている。「学級崩壊」をおこす怖れのある子どもは、チェックされる。教育の秩序を乱すこども達は排除する考え、つまり安心して仲間だけとのつきあいを前提にした学校教育を求める状況が生まれている。こどもは仲間はずれを怖れ、「自分の個性、特徴の表現はわがままではないか」と不安になる自分を押さえて、自己表現を隠してしまう。個性を表現すると、「人と違う」と見られ、「排除されるのが怖い」と話す大学生が増えている。「安全、安心の基地」で、自分をじっと押し殺す。目はつぶり、寝た振りしているが、常に気持ちは状況を読みながら覚醒している子ども達の姿が想像される。

障害のあるこどもの教育における人権の問題も、「障害のある子どもを分けない」ことを基本にして、「障害」のある子どもが通常学級で共に生き、共に学ぶ現実から教育を考え続けてきた。「共に生き、共に学ぶ」実践のなかでも、教育にある「障害」への排除性、忌避性が見えてくる。いろいろなトラブルを経験して、現実の生活に生まれる問題こそが学校教育の変革の切り口と考えてきた。トラブル、事件、問題行動にこそ変革を志向する必然性があり、具体的な手がある。「状況を変えて、問題を考える一人ひとりのぶつかり合い、つながりあいのなかで、人が何を求めて生きているのか」を具体的なせめぎあいのなかより、つかみ取ることの重要性を認識した。つまり「障害」に集約する課題の設定ではなく、生きざまの底に見えてくる存在を認め、存在をかけるニーズをとらえることが現実の教育には求められている。だからこそ、「健常」のこどもと「障害」のあるこどもを画一的に分離することを否定してきた。障害を理由にして、分けられた教育を前提にした「交流教育」は基本的な「せめぎあい」「トラブル」「傷つけあい」を避けてきた。障害のある人との触れあう教育を美化した。表層な心情の通いあいに満足して、癒されることを望んだ。人間関係は傷つけあいながらも、生きる本質を掴んでいく。日常生活に「やさしい同情」を幾度も重ねても、自己、他者とのつながりを縦横に変化させ、絆をつくることには至らないことも経験した。そして、「子どもの障害への対応」との矮小化された教育方法だけに限定される教育、心理、福祉の課題の設定は「生きるとは何か」の問題の本質には迫りきれないと考えている。

1980年代の「障害」のある人達が閉じられた施設、

家庭から脱出して、「社会で自立した生活に挑戦する」との運動は「障害への対策」、つまり医学モデルによるリハビリテーションを否定した。なぜ否定したのだろうか。それは「障害からのニーズ」だけではなく、人が共に生きていくうえでの基本的ニーズ、つまり、子ども達、教員、保護者が関係を切り結び、せめぎ合える、共に生きることを前提とするリハビリテーションにはなりえないと当事者がみずからの経験を通して、批判したからである。共生共学の教育も人が生きることを現実から考え、新たな現実をつくる事を人との関係のなかに見い出してきた。しかし特別支援教育の概念には、軽度発達障害のこどもを人として分離する教育を基本的コンセプトとしている。こどもが対等につきあい、傷つけあいながらも、「人間としての尊厳を尊重する」関係をつくる共生でないと意味がないものであることを考慮されていない。生活の安全、安心をもたらすため、学校社会の秩序づくり、効率化、そして「安心のシステム」に組みこむ特別支援教育が進められていくと予想している。子ども達の自己規制を求める状況のなかでは共生の教育の本質に迫る教育状況を創ることの壁が見えてくる。

6. 不安は誰がつくるのだろうか

外国籍の人について「不安」イメージと現実の資料の大きなギャプがあることが認められる。国籍が異なる人たちが多く住む大阪の生野区・東成区・天王寺区のまちづくり、そしてNPO法人「すいすい」など活動の例を基に考えてみる。

6-1. 大阪のほっとする話

大阪市生野区・天王寺区・東成区では昼間、人との出会い場所を見つけられないで家に閉じこもり暮らしている人が街へ出かけられる状況、自分の気持ちを言葉に表せないで生活している人が体ごと受け止められる状況を創りだしている。

「街に居場所がなく、どのように時間を過ごすのかを悩む人がある。まちの人のまなざしなどの理由により、人間関係を持ち続けることの「しんどさ」がある人がある。みんながほっとして、楽しく過ごす正月、御盆は精神障害のある人達には地獄なんですよ」と塚本正治は語る。それは医療機関は閉まるし、地域の福祉サービスも閉まる。孤独な不安な長い時間を過ごすなくてはならないからである。

そこで「ほっとした気持ちで自分のことが話せる相手がほしい」と自分の「ありのままの気持ち」を表現したり、交流する溜まり場づくりが広がっている。「ほっとした気持ちでHOTなコーヒーをのみたい」と

喫茶店（作業所が経営している）で、語り、笑いを交わす。そこには、人と出会いの機会をもちたい人、自分のことをボチボチと話したい人が集う。「昨日、病院から会いに来てほしいと何回も電話があったんや」との話が広がる。「どないしたんやろ」と顔を見合わせる。病院で孤独で不安な人の気持ちが溜まり場へ集う人達の気持ちのなかに流れる。他人の不安に自分の気持ちを重ね巡らせながら生きている。人の存在を認めることが自分の存在も認められる状況をつくる事を感じている。

人は自分の存在をみつめられたい。それは生きるエネルギーになる。「ひとりぼっちにしない」との合い言葉を基本にして、みんなが繋がる。人は人から認められて、生きていける。人は宝ものである。

6-2. 日常生活での人間関係が偏見を砕く

大阪の池田小学校の事件が起きた直後、生野の人たちの溜まり場（一階は生活用品を売る作業所、二階はみんなが集えて、話したり、昼寝をしたりできる場がある）を訪ねた。新聞報道では「精神障害者が小学校に乱入して、子どもたちを殺した」と最初、誤って報道したことで、大阪では「精神障害の人は怖い」との噂が流れたり、「気狂いに刃物をもたせるな」との話が現れた。作業所の人達に状況を聞くと「この町では、精神の障害だから、怖いとかそんな話はほとんどない。日頃から、互いに中村さんとか、名前を呼び合うつきあいをし、その人の生活やいろいろなことを知っているから、別に・・・」と、あっさりと片付けられた。

大阪の池田小学校事件は「犯人は精神科へ入院、通院していた経歴がある」「大量の精神安定剤をつかい犯行におよんだ」とマスコミ報道され、「異常な犯行」と「精神障害」とを結び付けられた。

「法律整備を進めなければならない」との政治家の発言が続いた。しかし、後に精神安定剤の服用をして、事件を起こした事でないことが判明した。しかし誤りを報道したマスコミは謝罪をしなかった。大阪府箕面市では精神障害者の地域支援センターの移転の反対運動、枚方市では、精神障害の人だけではなく「家族も一緒に追い出したれ」との感情が制御できない人達の動きが見られた。

しかし、大阪精神障害連絡会（当事者組織）では会員の要請で、池田小学校事件と精神障害の関係を否定する記者会見をした。記者会見は実名で、顔もボカシをいれないで話した。カミングアウトを堂々として、自分の存在をかけ、精神障害者として、画一してとらえ、偏見、差別に対象にしている考えを批判する記者会見をした。どんなに攻められようが、巻き返すことをみんなで続けていく。

大阪では「再び犯罪を犯すおそれがある精神障害のある人たちを病院、施設に隔離しようとする法律の制定」に徹底して反対の運動を続けた。「ひとりぼっちにさせない」を合い言葉にして、みんなが連帯の絆をつくり、自分を不安にさせない始点を確認する。不安になる住民へ「精神障害」との説明をきちんとしていくこと、そして何が偏見なのかを膝を交えて話をする。このような活動が自分たちの存在の大切さを自覚していくことに繋がる。自らが、信頼関係をつくるためには自分たちの命を懸ける偏見、差別性への闘いも辞さない。自らを解放するためには、まず自ら作り出している「人と人との壁、そして差別性」を日常生活の中で、差別をする人達と共に壊し続けるために、まず自己を表現して、存在をかけなければならないのではない。見えてこない「未来」への不安から自由になりたいと想うならば、閉ざされていた関係の回路、封じ込められていた自分の可能性を試すことの大切さが見えてくる。

「怖れ、不安の幻想」は止めどもなく、増幅されていく。そしてさらに偏見、差別を再び、産み出す土壌を創る。不安－偏見－分離－偏見－不安－の悪循環が加速されていくのは速い。それを安心－信頼－連帯－信頼－安心の循環に変える闘い、精神障害のある人自身が連帯の絆をつくり、何気なく重ねている人との生活、コミュニケーションを始点として、自分を変え、まちを変えようとしている。

6-3. 自分と重なりをつくることで見えること

大阪の東成区で開かれた「当事者は今」のパネルディスカッションから「自分の生きざまの語り」を引用する。

ある女性は「夫との人間関係」「子育ての悩み」「家のローンの精神的負荷」「姑との関係のこじれ」に悩み、落ち込んでいく。生活するためのお金を得るために内職、新聞配達と体を酷使して無理を重ねる。「かんばり続け、追い込まれ、そして病気になった。」そしてガス自殺未遂、飛び下り自殺未遂を繰り返した。さらに夫から「別れてくれ」との話がでてくる。家族会議の末、協議離婚になる。しかし今では「地域の溜まり場である作業所でいろいろな人達との出会いがあり、それで元気になっている」と話された。私も精神的肉体的な限界点を超え、さまざまなストレスが加え続けられる時に鬱になったことがある。人と会っても「どのように話したらよいのだろうか」と迷い、不安を持ち、悩み続けていた私は家に「ひきこもった」経験がある。夏の暑い日、カーテンを下ろしたまま、薄暗い部屋で何も考えられず、ぼんやりしていた。自分を否定して、自信もなくしていた。しかし友が食事に

誘い出し、外の空気に触れさせてくれた。どうにか社会へ出て働けるようになったのは、人から支えられ、助けられたためである。人との関係で生まれた悩み、不安は、人との関係を取り戻していくことにより回復できる経験をした。

精神障害への偏見を持つ理由は、互いの生活が垣間見える物理的、精神的距離が柔軟性を持ち、変化しきれないことである。自分の生活の経験と通底するようなことが見えてくる時、気持ちの落ち込みは決して異常、病気ではなく、生きて行く変遷のなかで出会う一つの浮き沈みの現象ととらえている。したがって、他の人の気持ちのことも、病気とか異常ととらえたくない。そして精神障害者とのラベルを貼られ、排除されることは他人事と思えなく、悲しくて、辛いことと想像できる。

現在、鬱の状態の時、連れ合い、友達、職場の人、見知らぬ人、多くの人に助けられている。人が人のストレスを和らげたり、取り除いたりする。時には人が人を緊張の状態に落とし込むこともあることを経験する。善良さ、残虐さなど、多様な姿を持つのが人間の本质と思う。

6-4. 「病気」を見るのではなく、他者の生き様を思い巡る

大阪の東成区の生活支援センターでは「まちづくり」の一つとして、障害のある人が自らの言葉で自分の生きてきた歴史を語る機会をつくりだしている。自分が生きてきた歴史を振り返ることは、自己の認識に関わることである。それは地域社会の人達が他者の生きざまに想いを巡らせる機会でもある。「どのように病になるのかを知る機会がないから偏見がうまれる。」との言葉に象徴されるように人と人を遮る壁は厚い。人は病気になる必然があり、理由がある。しかし「精神障害」との言葉は人と人とのコミュニケーション、思考を断絶、停止させる程の強烈なインパクトを持つ。そして精神障害者として、社会のなかで意図も簡単に疎外状況に位置づけられる。そのため自分の生き様を語ることは「精神障害」を狭義な無機質な知識にとどめないで、有機的な生きざまのなかに生まれる現象とする本質の理解に迫る。しかも他者と自己の人生を重ね合わせることで、通底するいくつもの経験の間に結ばれる関係に思いを馳せる。

また他人と自分の生き様について話をする時に、状況の認識の違い、文脈の認識の困難性など、不可視なところが多い。しかし野口善国（2003）は「見ていないから見えない」と基本姿勢を問いたす。「その人をもっと知りたい」との志向力の持続により、想像力の拡がりが生まれる。自分の殻に隠りながら、その人

を視てつものになつていく私が変わる。「異質な存在」と精神障害のある人を幻想化していた私が実体と現実の世界で繋がる。

6-5. 自らの呪縛と解放への課題の提起

「精神疾患」は、なぜ偏見、差別をもたれるのだろうか。

大阪市教育委員会^③の「精神障害者の理解を深めるために」(2003)には、次のような症状の説明がある。小学校の児童・生徒を対象として、わかりやすい指導書が作られている。以下に紹介する。

「精神の病、今日は「精神疾患」と呼ばせてもらうけど、いろんな症状がある。幻の聴覚と書いて、幻聴という言葉がある。「お前はバカ」とか、「お前は死んでしまえ」とか、自分を責める声が辛い。朝、起きてみて、テレビから自分の事を悪くいっていることが聞こえる。学校へ行ったら、みんなの声が「お前は死んでしまえ」という声に聞こえてくる。耳で「お前アホヤ、死ね」とか、テレビやラジオのニュース番組の声が「お前は死んでしまえ」とかに聞こえてくる。今だったら、暖房の音が「お前みたいな奴は世の中からいなくなればいいんだ」ときこえてくるとか。

自分を責める声が辛い。パニックが起きる。そこで自分を守るため、自分の事を悪くいっている声に向かい、「おれはあほやない」「何ゆうてんや」と反応する。それでも声がなりやめへんかったら、声が大きくなる。その声の聞こえる方向に物を投げたりする。それが窓ガラスにあたったりすると、ガラスが割れる。世間の人はそこだけを見る。

声が聞こえることに、自分を防衛しようと大きな声をあげたり、物を投げたりしてしまうことがある。その部分だけを視て「ほら、見てみ、精神の病気になると大声だして、物まで投げてガラスまで割っている」と言われる。これはあくまで、偏った見方や。その人とちゃんと人間関係を取り結んでいたら、筋の通った事をやってるわけや。」

6-6. 大阪の精神障害者施策の現実

「市町村ではどのように施策をつくりだしているのだろうか」と疑問がうまれる。

大阪市では2000年から市独自の事業として始めた「地域生活移行支援事業(退院促進支援事業)」^⑦がある。大阪府の調査では、現在、大阪市内に住民票があり、病気は完治して治療は終わったが退院できない人、いわゆる社会的入院をしている人が約4000人と推定されている。そのうち、住まいの確保により、退院できる可能性のある人は2257人以上いると考えられている。精神障害のある人達が病院に入院する状況は、

通常の人の入院とは意味が異なる。しかも5年、10年など長期にわたる入院になる場合は地域での生活の基本から取り戻していくこと、そして本人の意志を確認しながら、一つひとつの生活の技法のノウハウをつかんでいく「支援」が必要となる。自由は恐怖ではなく、自己決定に基づく生活は自分を取り戻す機会になることを自覚していく。

大阪の東成区の地域生活支援センター「すいすい」^⑧は自立支援員、ピアサポーターによる病院で生活する社会的入院している人達と面談、相談を続けている。そして病院から地域の社会資源(作業所、グループホームなど)への橋渡しをしている。電車の乗り降り、買い物、福祉施設の見学など外出の体験、グループホームなどへの入居体験などをまず一緒に試みる。退院後の生活に向けての話し合い・アドバイスを息長くして、その人の自己選択の幅を拡げ、決断する条件、つまり支援をする人との関係を信頼へと変えていくことに挑戦している。退院した後、住む家の確保は、現実には厳しい差別に出会う状況がある。大阪市では、市営住宅は「精神障害者は単身で入居できない」規定があり、壁がつくられている。そのために家賃が高い民間の住居を借りざるうえない。手続きは、不動産業者を介する。塚本正治^⑨は「業者、家主から9割近い人が入居を断られている現実がある。」と話す。市営住宅などの地域資源を誰もが利用できるように、設備などを改良するだけではなく、入居のルールにある精神障害のある人への差別から再考することが求められる。

生活の支援など福祉のサービスの利用、生活費などの経済状況の確認など、課題は多い。意識のバリアフリーが重要視され、「すべての人が共に生き、働き、遊ぶ」ユニバーサルな社会、つまり平等感のある社会づくりの突破口として目標を設定している。地域の人たちと共に生きていく経験が偏見、差別を少なくする。新たな人間関係づくりに発展すると期待するが、はじめの一步でつまづいている現実がある。

危険と思われる人は排除して、「安全で安心できる生活」を過ごしたい。気心の知れた仲間内だけが「安住を求めている社会」に法律制度を作り変えていこうとする意図が見えてくる。さらに私たち自身も「安全、安心の基地のなかに引きこもり」現象を作り出しているのではないだろうか。

崎山政毅^⑩は歴史の交渉作業の過程に「これまでの歴史の出来事に幾重にも走る烈開を縫い合わせ、可能ではないと考えてきた可能性が可能な現実として顕われようか結ばれの試み」の提起をしている。

病気、障害を差別して、人間まで抹殺した歴史には、一人ひとりの違いを互いに楽しめる「知恵」はない。

みずから限界を作ってきた。一緒に生きて行く知恵があれば、苦しい時もどうにか生き延びていける。自分の生きる状況について、総体として見通すことができる。「共生社会の実現」は人間の知恵の限界に挑むことである。

7. 幻想のなかに閉じこもる現実からの脱出

7-1. 「このような状況を変えたい」

障害のある人への幻想、そして不安はなぜつくられるのだろうか。一つは信頼関係の不在、二つにはコミュニケーションの壁、つまり互いの人間関係の壁が認識されていないことからくる「コミュニケーションの障害」、三つにはせめぎあう共生関係の欠落との仮説を考えている。現在、知的障害のある人たちが展開しているピープル・ファースト運動を基に「信頼関係、コミュニケーションの取り方、せめぎあいの方略」などをとらえ返して考えてみる。特に長い歴史のなかで幻想を持ち続けられ、教育、福祉、医療などにおいて、今なお偏見をもたれ、被差別状況にある知的に障害のある人達の活動について注目してみる。具体的なピープル・ファースト運動のなかで問題を提起していることから、地域社会の人達との信頼、コミュニケーションの方略を見る。そして「信頼」「コミュニケーション」「共生」の意味について考察する。

ピープル・ファーストは1980年代にアメリカ、オレゴン州で始まった知的に障害がある人たちの当事者運動である。「障害者であるより、人間でありたい」(People・first)と、体が記憶している自らの言葉を捜し、自由な表現をしている。自己主張を堂々としている運動であり、世界中に広がっている。

7-2. 信頼関係への道は自己主張から始まる

ピープル・ファーストの人達は「まず、信じてほしい」と主張している。そして信頼をキーワードとして運動が進められている。

ピープル・ファーストの運動で主張される「信頼」とは何だろうか。まず具体的に過去の自分の偏見、差別に遭った経験を当事者が語ることから始める。たとえば、親、教師、福祉関係の人たちが「いかに結婚を止めようとしたのか」の話がある。「私たちは誰でも、誰かと親しくなりたい」との人間、誰もが持つ基本的欲求を主張している。そして障害を理由にタブー視されてきた「セックスなど性的関係」についてのせめぎあいのテーマを議論し始めて、自己の障害観、社会通念を問いたです。「愛や親しみの表現である」と、率直な表現には、これまで抑圧されてきた過去、そしてこれからは自由を望むことが想い巡らされる。親、教

師などから「あなたには性のことは考えなくてもよいとか、デートしたり、親しくなつてはいけないと言われた。どんなに悲しく、くやしく、怒りがこみあげてきたのか」と語る背景には「社会通念」を支える私へ向けられている問題提起がある。

「本当は何をしたいのだろうか」と疑いをもたれ、「意見を持てない、表現できない人」として、幻想に縛られてきた人が自己主張を始め、せめぎあいを始めた。特に、保護することが最高の幸せと信じ込んできた親、教師、福祉関係の人達は驚いた。まわりの人達が善意を持ち、本人の意見を想像したりして、代弁してきたことを否定されたからである。

これまでの自分の生き方を否定してとらえてきたこと、これは「自分の存在の否定だけではなく、自分の命の否定につながる。自分の命を蘇らせるためには、何をどのように変えていくのか」を考えている。ピープル・ファーストの会議での自己主張は自分にまず向けられていると思える。「過去の徹底した問い直し」から何がみえてくるのか。自信をとりもどすための仲間との共生、そして自分捜し、自己の存在の確認である。自分を表現し、まわりの人達との関係をつくりながら、自己信頼から他者への信頼の回路をつくる。

親が愛を込めて「あなたには、結婚して生活することは難しい。今の社会は危険なことが多すぎて、それらの問題へうまく対応できない。子どもが生まれると、育てなければならない。それはあなたたちには難しい。結婚はしない方がよい」と将来を熟慮して、親が懸命に説得する。しかし親や教師の能力主義、社会通念による秩序形成の価値観、そして親の気持ちにある「自分はリスクを望まない、安楽に生きたい」との自己中心の思いとせめぎあう。社会通念に基づく差別を自らが否定する。自分たちの人権を抑圧している総体を見抜く。「世間体」との社会の多数の考えに巻き込まれ、自分のために価値観を変え切れないで「身を守り生きている」親とのせめぎあいが始まる。

このせめぎあいには(1)自己を取り戻すことへの挑戦(2)他者への意見表明と連帯の呼びかけ(3)自己決定の実現への闘いの志向性が認められる。

7-3. 自己決定を支えるアドバイザーの存在

当事者は人権の獲得、自己信頼の獲得の方略として何を求めているのだろうか。ふたたび、ピープル・ファーストの運動の提起に戻る。

障害のある人は自分の望むことを実現するために、汗をかいてくれる人を求めている。そして、地域社会の人達とのつながりの橋渡しをしたり、人間関係を拡げてたりする友達をアドバイザーと呼び、具体的には知的障害のある人が信頼できる人をアドバイザーとし

て選ぶ。専門家、教師ではなく、友達が選ばれることが多い。なぜだろうか。彼等はきびしい偏見、差別があることを認識している。自己の障害観と共に、それらを変えて行く闘いに連帯ができる同志がアドバイザーである。対等な関係で社会、地域社会に働きかける基本的スタンスは重要な条件である。地域社会のなかで具体的に皆とどのような生活をしたいのか。そしてどのように自分を知ってもらうのが基本的課題である。地域社会での生活経験を重ねていき、アドバイザーと共に人間関係を築く。対等な人間関係を求めて。

アドバイザーは人権感覚のある人、そして地域の人達へ当事者が「どんなことができ、どんなことはむずかしいのか」を説明する。たとえば年金を銀行から引き出す場合も、あらかじめ、銀行の人へ彼が自らお金を受け取りたいとの情報を提供する。本人がわかる説明の方法、内容についてのアドバイスを銀行の人などへする。本人が銀行へ行き、お金を引き出すことができる環境を創り出すのである。地域の人たちの意識を現実の生活をとおして変えていく。

このピープル・ファーストのアドバイザーの概念は現実の生活を起点として、社会の矛盾、偏見に向き合うことである。前向きな期待観、しっかりと互いに向き合い、話し合い、せめぎあいをしていくコンセプトがある。

7-4. 自己信頼へのコンフリクト（衝突）

隔離されていた「障害のある人達」が自己信頼、そして自己決定の状況を作りだすために、信頼できる友達（アドバイザー）を地域に求め、一緒に共同体づくりを始めている。一人ひとりの関係を紡いでいながら、互いが対等な関係の状況で自己を構成して「自分らしさ」の発揮の可能性を求める。

しかし人間関係が深まれば、トラブルは増幅され、対等性の崩壊の危機がうまれる。たとえば、介助にみられる障害のある人の安全への保護は「障害のある人の存在を脅かす危険性」を孕んでいるのである。車椅子で歩行をする時、歩くスピードは介助の人に任せられ、時には行き先を尋ねられることにおいても、目的地へ辿り着くまでの確認においても本人が疎外された状況が続く場合がある。判断、決定を権利としなければ、自己の存在が透明化される状況が生まれる。介助の人の判断と障害のある人の決定が異なる場合、保護的愛、「愛護」の思想を否定して「せめぎあうコミュニケーション」が重要になる。障害のある人も介助する人への負い目から不満を押さえ込み、沈黙することが多い。介助の人に「不満」をぶつくと、介助の人が去りはしないかと不安になるためである。しかし「せめぎあうコミュニケーション」と人間関係におけ

る相互の自立は関係が深い。

牧口一二⁽¹⁵⁾が紹介した宇都宮辰範の生き様には「せめぎあい」と自立を具体的に考えさせられる。宇都宮は閉塞した家族との生活から脱出した。不安の闇に埋没し、自分を喪失することに恐怖を覚えた。人目を突くベッド式車椅子により旅へ出る。歩行する時、「手伝ってくれる人に決して遠回りをさせない。あなたが行きたい道と私が行きたい道が重なるところだけ押してくれ。あとはまた、自分で手伝う人を捜す」ことを鉄則にした。自分の存在を透明にする保護、同情などの「障害観」を毎日、否定し続けた。人とのつながりのなかに、負い目を作らない。自分の存在を脅かす他者の「障害観」とせめぎあい、自らが自分を蔑むことにつながることは命を掛けて、拒否することを続けた。たとえ、雨のなかで濡れながらも一人でベッド式の車椅子に横たわり、一緒に歩く人を捜した。たとえ夜中、長時間、車椅子のなかで一人でいる事が続いても。自分へのプライド、存在の意味をつくる以前に、まず自分を蔑まないことである。そのためには、生きざまを否定しない「せめぎあい」の毎日の生活の鉄則にこだわった。自己を持ち生きるためには、自己と他者との必死のせめぎあいが必要となる。

8. 最後に

経済のグローバル化は「市場の自由競争は優れた製品をもたらす」として、徹底した利益追求の原理とともに、企業間の熾烈な競争をもたらした。「競うことで商品の質の向上を図れる」との考えは「モノ」の生産だけでなく、地域の福祉サービス、学校教育にもこの原理は持ち込まれている。グローバルに競い合うことで、国境を越えて、独創性のある商品を安価で活用できる現実も産まれた。しかしながら、競争に勝つための効率性、そのためには「必要と認められないモノ、人を捨て去ること」が正当化されている。特に企業には「前年を上回る利益を達成することは当然とされるだけではなく、市場の期待に応える業績の達成、そしてサプライズ情報までも求められる」状況がある。さらに目標の達成には「必要でない人」はリストラされても「仕方がない」とあきらめさせられる状況が作りだされ、次第にその考えが社会通念化されている。結果として、「勝ち組」「負け組」に分けられている。荷宮和子⁽¹⁶⁾は「勝ち組」「負け組」の言葉の出現に「自分のことは棚にあげ、赤の他人の値打ちについて、あれこれと自分勝手に値踏みすることに何の疑問を持たない人間になってしまった」と指摘している。彼女はむしろ「あれこれと値踏みする快楽」を私たちが手に入れたととらえている。そして「自分こそは勝ち組

として生き残りたい」と、必死に競争に吞まれていく状況には「負け組」にならざるうえない人たちの気持ちに通いあうコミュニケーションが捨て去られていく。そして自己中心的考えが拡がり、個人の利益、所得の向上への志向性が鮮明になっている。

個人の「能力」に業績の評価は集約されてきている。現実の仕事を支えている「裏方」の評価には及ばない。そして個人の「能力主義」を基にリストラとの「市民権」を得たような言葉での排除が進む。仕事を達成するために必要な共同性を支える条件である「平等感」が崩れてきている。

さらに学校も学力向上に効率的な教育を提供する場に変化させられている。教師、子ども達も点数で習熟度を評価されている。その評価を活かす話し合いをして、一緒に悩みを考え、気長に問題を解決することをさぐる余裕が消えている。個人評価だけが無機質の情報として、人間としての評価まで及ぼすかのように機能している。たとえば障害のあるこどもの場合、個人の評価が個人の能力の査定とされ、個人の責任に還元されていく循環がみられる。高村薫^⑥が指摘している『非情な競争が当然視され、老後の生活設計も含めた「未来」が自己責任とされ、経済格差の拡がりも放置されるような状況に人は耐えられない。』やりばのない憤り、孤立する虚しさ、そしてあきらめ、疲労感が渦巻いている社会がある。

一方では、インクルージョン、つまり多様な一人ひとりを包みこめる社会づくりへの思想が生まれ、拡がっている。「多様な価値観を認め、それぞれの人の存在が平等であることを認める」共生社会の創造を目的とする思想である。

スペインの作家ファン・ゴイティソーロはパリの下町でクーデタがあり逃げてきたトルコ人から、トルコ語を学びたくなり、毎日、近所の家庭で学ぶ。アルメニア人、ユダヤ人、クルド人と共に生活をして、図書館で多くの本から学ぶのと同じくらい地元の社会から学んだと語る。そして彼は「異なる民族、人種の人達を敵とみなさないで、仲間にしよう」「新たに来る新入りの人たちから様々なことを吸収することで生き続けられる」と語る。

新たな文化、それを産む社会は様々な人が入り混じる。個人の差異性を相互の生活の豊さに還元する。異質を排除することは新たな文化も、生きていくエネルギーも生まれえない。しかし現在の日本では、人と人の関係が希薄になり、自己の存在、アイデンティティを揺さぶられる人間関係、コミュニケーションが激減している。むしろ社会状況が不安になるに伴い、異質な文化をもつ集団を画一化して、差別したり、排除することで、混じり解け合う、そして新たな創出の「おも

ろさ」の視点が次第に消えて去っている。異質な文化との「おもしろい」つながりの空気を消し去ったのは「安全、安心を優先して求め、衝突を避けたがる自己防御志向」と考えている。そしてリスク（危険がいっぱい）な現実こそ、新たな自己、そして他者との関係を産み出すチャンスがあるように思える。

引用文献

- (1) 足立昌勝、市民社会に差別をもたらす心神喪失等処遇法案の本質、福祉労働 95、12-24、2002.
- (2) 安藤真男、安心のファシズム-支配されたがる人びと-、岩波書店、2004.
- (3) 大阪市教育委員会(編)、躁鬱(そううつ) 病ってどんな病気、「精神障害者の理解を深めるために」、大阪市教育委員会、2003
- (4) 河合幹雄、原田敦、土井隆義、犯罪不安社会の実相、153-162、世界、岩波書店、2004.
- (5) 芹沢俊介、長崎少年事件にみる子どもと親の罪と罰、論座、朝日新聞、2003.
- (6) 高村薫、多様性回復は投票から、オピニオン、朝日新聞、6月14日、2004.
- (7) 地域生活支援センター NPO. HIT、退院促進支援事業とピアサポートについて、4-7、NPO HIT ニュース、2004.
- (8) 塚本正治、ありのままに地域で生きたい、連続講座 1、三重県人権問題研究所研究紀要、三重県人権問題研究所、2004.
- (9) テッサ・モーリス=スズキ、愛国心って何だろう、「ニッポン大好き」のゆくえ、論座、朝日新聞、2003.
- (10) 内閣府、障害者白書、障害者対策に関する新長期計画の策定、内閣府編、2004.
- (11) 荷宮和子、殺伐とした国・日本、声に出して読めないネット掲示板、第4章、中公新書ラクレ、2003.
- (12) 野口善国、西山明、少年犯罪をどう見るか、204-212、世界、岩波書店、2003.
- (13) 部落解放・人権政策確立要求中央実行委員会、2004年度版全国のあいつぐ差別事件、解放出版社、2004.
- (14) 法務省法務総合研究所、犯罪白書、第2章、精神障害者の犯罪、2003.
- (15) 牧口一二、風の旅人、三重県人権問題研究所、2001.
- (16) 吉田智弥、部落問題はなぜ終わらないのか、73-83、部落民とは誰か、現代思想、第27巻2号、1999.

参考文献

- (1) 荒川哲郎、「風の旅人・解説書」三重県人権問題研究所、2003
- (2) 石毛瑛子、告発・主張・そして自己への信頼と共感、福祉労働、61、現代書館、1993.
- (3) 小沢牧子、カウンセリングの技法とは何か、「心の専門家」はいらない、洋泉社、2002.
- (4) 崎山政毅、田崎英明、細見和之、歴史とは何か、河出書

房新社 1998.

(5) 崎山政毅、痛みをわかる、214-221、部落民とは誰か、
現代思想、第 27 巻 2 号、1999.

(6) ピープル・ファースト国際会議、国際会議旅行団、
1994.